

誰もが踊りたくなる場づくりー視覚障害者に対する表現運動・ダンスの指導ー

眺野 花（関西大学大学院人間健康研究科） 原田 純子（関西大学）

1. 研究の背景

視覚障害とは視力や視野が基準より欠けた状態が永続することを指し、現在は、視覚支援学校（盲学校）や地域の学校など、視覚障害児が通うそれぞれの学び場において、視覚障害児への適切な教育が求められている。視覚障害児は学びの基本である「見てまねをする（視覚的模倣）」が困難なことによって、学習の理解や習得に晴眼児より時間がかかることがある（河合，2020）。また、目が見える場合は、乳幼児の頃から視覚的に捉えたおもちゃを触ろうとしてハイハイをしたり腕を伸ばしたりなど、外界の視覚的な刺激によって興味・関心を持ち、自ら身体を動かそうとすることで、運動を獲得していく。しかし、視覚障害児の場合は、視覚的な刺激を捉えにくく、また空間を認識・把握することも難しいため、外界に対する関心が育ちにくかったり、自ら動くことに対する不安を持ったりして、運動のきっかけを掴みにくい（今井，2018）。視覚障害者の運動についてレヴィは「目が見えない状態で動くことから来る恐怖があるため、ためらいがちで制限された運動形態を示すことがよくある」と述べている（Levy, 1998=2018:295）。

運動に意欲を持ちにくい視覚障害児であるが、ダンスのように音楽やリズムを活用することは動きのイメージを描きやすく、楽しく能動的に取り組める手段であり、視覚障害児の運動意欲及び能力の向上に極めて有効であると考えられている（猪平，2008）。

現在、我が国の教育課程においては、文部科学省の学習指導要領により、「表現運動」や「ダンス」が小・中学校の体育の中で男女必修の種目となっている。「表現運動」や「ダンス」には、「勝敗がない」、「個性が活かせる」、「友だちとの一体感が味わえる」など他のスポーツ領域とは異なる特徴が多く見られ（村田，1991）、障害の度合いや種別等に関係なく、個々が自分らしい表現を楽しむことが可能な種目である。全員に同じ動き（振り付け）を指導しようとする場合、一般的には、指導者が手本の動きを示し、学習者はその動きを見ることによってイメージを掴んだり、模倣して覚えたりするが、視覚障害者の場合は、指導者の動きを視覚的に認識することができない。そのため、視覚障害児に対するダンスの内容や指導方法には、特別な工夫が必要であると考えられる。

2. 研究の目的と方法

本研究では視覚障害児に対するダンスの内容と指導方法について検討することを目的とする。そのためにまず、全国の視覚支援学校にダンスの指導に関する調査を依頼し、ダンス指導の実態と問題点を明らかにする。さらに、具体的な指導の映像の考察から、理想的な指導の内容とあり方を検討する。

3. 実態調査について

トペを使用する」、「動きに名前をつける」などの記述から、“わかりやすい”指導を心がけていることが察せられる。その〈目標・成果〉として、「ボディー・イメージを育てる」、「手足の協応」、「リズム感の習得」などが挙げられていた。

一方で、『視覚障害児に表現運動・ダンスを指導する上で、とくに難しいと感じること』においては、「動きの言語化の難しさ」が非常に多く記されており、「思い切り身体を動かす経験が少ない」視覚障害児は、「動きのイメージ」や「踊りの全体像」を捉えることが難しく、それをいかに具体的に端的な言葉で伝えるかは、指導者にとって大きな課題となっていることが分かった。

以上の結果から、ダンスの指導においては、「リズム」に合わせて踊ることや楽しく身体を動かすことを目標に、動きをできるだけ確に言語化して視覚障害児に伝えようと工夫をしているものの、ダンスの動きの言語化は非常に難しく、困難を感じている指導者が多いという実態が明らかになった。

4. 映像資料について

4-1. 資料の概要

視覚障害児に対するダンスの指導は現在全国の学校で実践されているが、その実態は明らかにされていない。貴重な実践研究の1つに、佐分利（2002）の「視覚障害児とダンス」がある。本研究では、当論文で扱われたダンス授業の映像を、“指導者”に着目してあらためて試聴し、“指導者の動き”と授業の内容について再考する。

佐分利（2002）は、T県盲学校小学部に在籍する視覚障害児に対して実施されたダンスの研究授業について、学習前後に課した同一の課題を分析し、運動技術や表現技能の変化を考察することによって、このダンス授業の有効性を明らかにした。映像は、この授業（撮影1999年11月/48分）を撮影したものであり、その内容は、児童と教師の原体験をもとに構成された創作ダンスの作品を体育館で練習している様子が記録されている。

4-2. 映像からの考察

この映像では、教師5名（主担当1名、補助4名）と視覚障害児5名が、創作ダンス作品『大きな布を使って-布から生まれるストーリー』の動きの練習や創作をしている。作品は音楽によって場面が切り替わり、1枚の大きな布を使用しながら、海、動物、花火などを表現している。

印象的であったのは、リズムのない音楽をBGM（背景音楽）として使用していること、子どもたちに意見を聞きながらその場で作品を創っていること、そして、教師全員が身体を大きく動かして踊っていることだった。児童には視覚障害があるため、教師が手本を示してもその姿を視覚的に認識したり、その動きを模倣したりすることはできないが、教師らは例えば児童の後ろを追いかけながら、自身もジャンプをしたり転がったりなど、ダイナミックに踊っていた。児童らはそのような教師らの踊りのエネルギーや勢いを感じ取

り、誘発され、踊り出しているように見えた。また、新しい動きを考える場面でも、児童らは次々に自身のアイデアを発表しており、ダンスの授業に意欲的に取り組んでいることが伺えた。

5. 問題提起～結論にかえて

実態調査の結果では、ダンスの指導においては、「リズム」に合わせて踊ることや楽しく身体を動かすことを目標に、動きをできるだけ的確に言語化して視覚障害児に伝えようと工夫をしているものの、ダンスの動きの言語化は非常に難しく、教師は指導に困難を感じていた。一方で、T 盲学校の主任は常に言語で指示を出している訳ではなく、また、リズムを刻まない音楽を使用して、子どもたちは楽しそうに伸び伸びと踊っていた。

ここで検討すべきは、まず、視覚障害児に対するダンスの内容である。ダンスの授業は運動会での演技披露の練習に振り替えられることも多く、どうしてもリズムを刻んだ曲に合わせて、皆で同じ振り付けを踊るといった教材になりがちである。しかし、中学校の学習指導要領では、リズムに合わせて踊ることを特に重視しているわけではない。

本調査で明らかになった、教師が大切にしている“音楽のリズムに合わせて、皆で同じ動きをする”という目標設定そのもの、すなわち教材が指導を難しくしている可能性はないだろうか。映像の T 盲学校のように、一人ひとりの生徒の内側から出てくる動きを最大限に活かした教材であれば、複雑な動きの言語化とそれを伝える困難さという問題は解消されるであろう。さらに、教師は動きを言語にして伝えるだけではなく、実際に一緒に踊り、そのまるごとの身体の勢いやエネルギーを子どもたちと共有するような指導を行うことが必要ではないか。“視覚障害児は目が見えないから動きの手本を示すことは不要”というのではなく、視覚からの情報に制限がある分、他の感覚を研ぎ澄ましていると考えれば、身体全体で感じ受け止める彼らの感性を信じて、指導者も身体を目一杯動かして一緒に踊ることで、視覚障害児が“踊りたくなる場”を創ることは可能ではないか。

今後も、視覚障害児に対する教材の内容や教師の関わり方を検討することによって、ダンス授業における“踊りたくなる場づくり”についてさらに探究を深めたい。

【参考文献】

- 猪平眞理 (2018) 「視覚に障害のある乳幼児の育ちを考える」慶応義塾大学出版会.
- 今井理知子 (2018) リズム運動で楽しく身体を動かす :70-75, 猪平眞理「視覚に障害のある乳幼児の育ちを考える」慶応義塾大学出版会.
- Levy, Fran J. (1988) Dance Movement Therapy—A Healing Art, Amer Alliance for Health Physical. (町田章一訳 (2018) ダンス・ムーブメントセラピー—癒しの技法. 岩崎学術出版社: 295-296.)
- 佐分利育代 (2002) 視覚障害児とダンス. 舞踊学, 2002 巻 25 号 :1-7.
- 村田芳子 (1991) ダンスの特性と学習指導. 舞踊学講義, 大修館書店 :132-141.